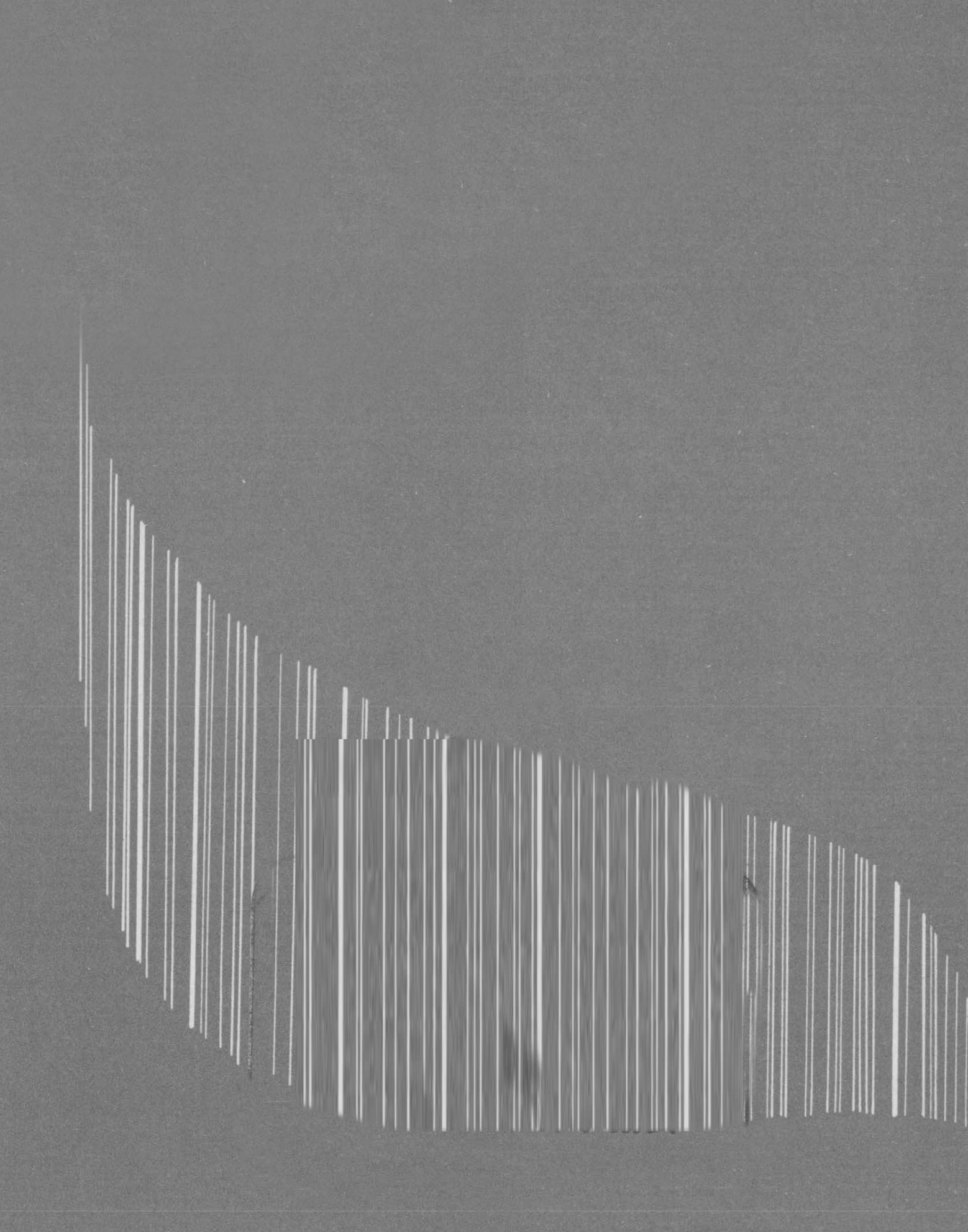


太下宇陀児浜尾

日本推理小説大系 4 東



大下宇陀児 浜尾四郎集

日本推理小説大系 4 東都書房

日本推理小説大系第4巻

大下宇陀児 浜尾四郎集

定価三八〇円

著者 大下宇陀児 浜尾四郎

発行者 西村俊成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三二一

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三六年二月二〇日第一刷



目次

大下宇陀児

虚像 5

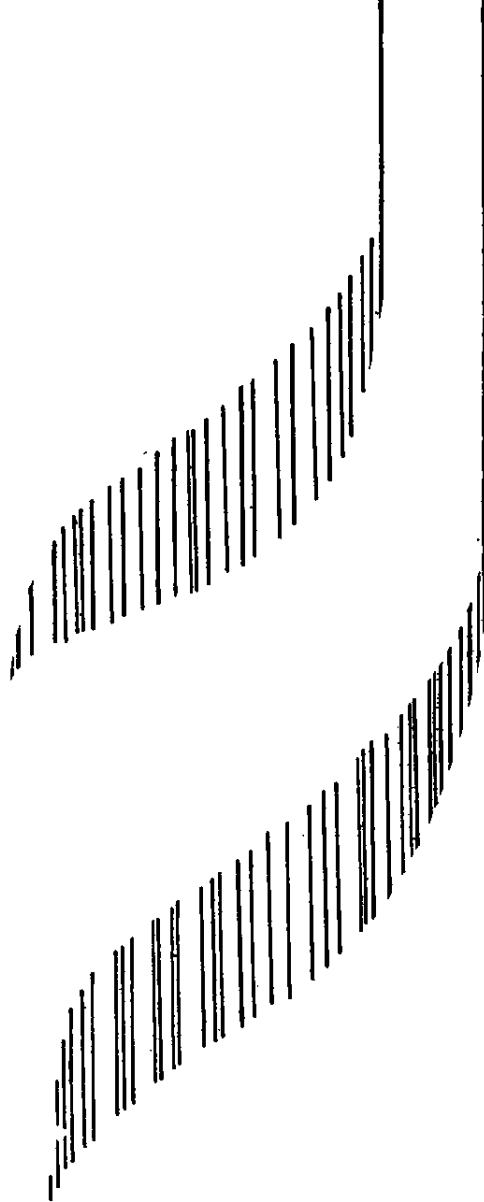
悪女 97

浜尾四郎

殺人鬼 111

解説 中島河太郎 288

天下宇陀見



虚像

遙かなる思い出

1

あたしのことをほめてくれる人は、世界じゅうを捜しても、そうたくさんにはいないだろう。

「あれは女じゃない。人間ですらない。悪魔の化身だ」

と罵る人があったにしても、あたしはべつに驚かない。

あたし自身、あたしを善良な人間だなどとは考えないし、そもそもあたしは子供のころから、お友だちや世間のひと、それから学校の先生などにも、ずいぶんと悪口をいわれたことがあり、また憎まれ嫌われた記憶があるのだ。それにつきあたしは中学の三年の時、学校へ、キャムベルさんという、アメリカの老婦人がきた時のことを思いだす。

キャムベルさんは、ワシントンの郊外に住む、たいそうお金持の未亡人だということだったが、教育には熱心で、その方面でのすぐれた研究や著書があり、日本の中学校のあり方を視察にきたのだったが、なにか行き違いがあったのだろう、学校へはキャムベルさんがその日にくるというのを、あらかじめ知らせてなく、だから学校では、準備が少しもしてなくて、すっかりあわててしまったものだった。

学校では、英語のH教師が、ひとりだけ英語が上手だった。

ところがH教師は、お尻にねぶとをこしらえて学校を休んでいるし、ほかの教師は、教科書で生徒に英語を教えることができて、外人相手の会話となると、まるっきりできない。

「いやだな。おれ、女の外人ての、とくに苦手だからな」

「ぼくも、ごめんこうむりたいね。Hがいれば、安心だけれど」

と、Kという教師、Sという教師が頭をかいで困っている。

あたしはその時、教員室へ行っていた。

クラスで出している「緑蔭」という新聞へ、ある先生の教え方について、こうして欲しいという希望を書いたら、それが先生を非難したということになった。そのために教員室へ呼び出され、担任の先生から、お叱りをうけていたのである。

キャムベルさんのほうは、学校の玄関で待た

せたままにしてあるらしい。KとSが、うるうるまごまごしているのを見ると、あたしは性分だから、黙っていられなくなった。キャムベルさんの御案内を、あたしがしようか、とつい、いい出してしまった。

KもSも、びっくりしてあたしを見たが、すぐにはふたりで、まぶたをパチパチさせ、二度ほど顎をうなずかせてから、

「うん、そうか。生徒の案内のほうが、かえって気に入るかも知れないな」

といったのは、生徒だったら、なにか間違いがあったところで、あとで学校としての面目は立つ、と考えたからのことであろう。とりあえず、キャムベルさんには、あたしがついて学校の中を見てまわり、そのあいだに、H教師を自宅まで迎いにやるということになった。

眼鏡を三種類も持っている、そして背が高く、男のように骨っぽい感じのキャムベルさんを、あたしは教室へつれて行ったり、生徒の手芸品や絵画について説明したり、また標本室へ案内したりした。そうしてキャムベルさんはあたしのことを、

「英語が上手で、可愛くて、ベリ、ベリ、ワンダフルガールだ」

といって、ほめてくれた。あとにもさきにも、あたしがそんなにほめられたことはない。それにキャムベルさんは、お世辞でそういったのではなくて、心からほめてくれたのである。それには証拠がある。のちに、会話の得意なH

教師がきてから、あたしの案内役は終わったのだけれど、校長室でキヤムベルさんを囲んでの懇談会となった時に、キヤムベルさんは、とくにあたしに、もういちど会いたいといった。そうして、小使さんに呼ばれて行ったあたしに、大きくなったら、アメリカへ勉強に来なさいといい、また美しい絵のある植物の本を一冊くれたし、堅く強く、お別れの握手をしてくれたのだった。ほめられたから、どんなにあたしは嬉しかったか知れない。

でも、キヤムベルさんが帰ってしまったあと、教員室では、あたしの話が出たのだそう。そしてM教師——それが、クラス新聞の「緑蔭」へあたしを書いた社会科の教師だ——は、

「しかし、大谷千春^{おおたにちはる}は、キヤムベル夫人のしゃべることはわからないんだよ。かってに自分のいいたいことをいつてるんだ。それにその英語が、パン助と同じ英語だったからね。聞いていて、こっちがハラハラしたよ」

といったし、またクラスの担任A教師は、

「大谷千春は、一口にいうと、無類の強心臓だね。成績はいいな。絵と音楽をのぞいては不得手なものはひとつもない。ところが、あまりが悪いとか恥かしがるとか、そういう感情が全然ないからね。クラスの友だちは、出しゃばりだっていつている。何かあると、すぐまっさきに飛びだしてくる。思ったことは、ズバズバいう。誰にも遠慮しない。だから、クラスじゃ憎

まれていてね、お友だちができないんだよ」

とあたしを批評したのだそう。

これはその席へ、お紅茶を出しに行っていた、小使さんの小母さんが、あとであたしに話してくれたことである。

あたしは、口惜しくて、身体がブルブルするほどだったが、泣かずにこらえた。

なるほどあたしの英語は、

「ユー、トゲザ、ミイ、アップ、ステア、ゴー。ゼア、ジャパニーズ、マット・ルーム、フォア、ガール、スチューデント」

といったあんばいだったのだから、パン助英語だといわれてもしかたがないけれど、せっかくおいでになったキヤムベルさんを、玄関でお待ちせしたまま、モジモジと尻込みをしているよりはいいではないか。それに、出しゃばりだの、強心臓だのというのもあんまりだ。あたしはただ、その場の様子を見るに見かねて、案内役を買って出ただけのことである。

もっとも、この担任教師の批評も、反省してみると、あながち間違っている、とばかりはいえないものがあることを、あたしはちゃんと知っていた。

クラス中での憎まれもので、仲良しができなかったというのは、ほんとうだ。

クラスのお当番でお掃除をする時、雑巾がけを嫌う子がある。社会科の調査で、自分は何もせず、ひとの集めた資料を盗む子がある。みんなが腹を立て、蔭でその狡い子の悪口をいうが、

あたしはそういう時に容赦しない。直接にその狡い子をつかまえて、悪かったといってあやまるまで、責めつけてやる。ほかのひとたちは、それを聞いていて、いかにも胸がせいせいしたという顔になるのだが、さてそのあとは、誰もがあたしを敬遠するようになるのである。「緑蔭」へM教師のことを書いたのも、同じ一つの例だった。クラスじゅうのものが、無味乾燥な数字ばかり並べるM教師のお話には、困りきっているくせにそのことを口へ出さない。あたしは、みんなにかわっていったつもりだったのに、結果は、教員室へ呼びつけられるようなことになったのである。

あたしを、議論好きで、岩の頭へでも理窟をつけるのだと、いった人があった。

女の子にしては、実行力に富むといった人もあるが、そのあとへ、しかし少々やりすぎる子だ、とつけ加えるのを忘れなかった。

あたしは、そういう非難や悪口には、だんだんと慣れっこになってしまったし、しまいは、他人から何をいわれようと、それを気にしないでいることにきめたのだけれど、いちおう弁解するならば、あたしのこの性質は、亡くなった父からの譲りものだから、しかたがないのだともいえるだろう。父は、あたしにとつて、最大の影響力をもった人間だった。そして、たいそう強情っぱりで、負け嫌いで、悪くいうと、ずいぶん押し強い人物だったのである。

父は名前を大谷正明おおたにまさあきといった。

もと海軍軍人であり、昭和二十年の終戦當時は中佐だった。

江田島の海軍兵学校時代は、稀に見る秀才として知られたそうだし、近代科学兵器、とくに潜水艦については、海軍部内にあっても有数な、精密かつ該博な知識の所有者だったということだが、江田島の同期出身者は、のちにたいてい大佐になっているのに、父だけがおくれて、中佐まで進んだだけだというのも、父の性質が禍いして、先輩や同僚の気受けがよくなかったせいだ、と聞かされたことがある。

父は、相手が、先輩であろうが上官であろうが、間違いないに対しては、遠慮えしゃくなく、やっつけたのだそう。弁が立ち、理論闘争もうまかったのだという。あだなを土佐犬といわれた。そのあだなは、もう郷里の中学時代からのことだったらしい。もちろん喧嘩好きで、相手を選ばず、咬みつくという意味であろう。たいていのことから、父は嫌われものであり、敬遠主義をとられた。しかも父は、そういう損な性質を、自分でもよく知っていたが、改める気持にはなかなか、なれなかったのだとあたしは思う。

そうしてあたしは、その父に、そっくりそのまま、似た性格の女として、生まれついてしまったのだ。

2

父は、世にうとまれるような性質の持主ではあったが、それにしても本質的には、正義感が強く、少なくとも、決して悪人ではなかったというところを、あたしは父のために、断わっておかねばならない。あたしは、そういう父を、常に尊敬し信頼していた。

父も、よくあたしを愛してくれた。

この父と、ひとりきりの子供だったあたしとのあいだの愛情は、世の常のものではないほどだったかもしれない。

幼いころ、父は軍艦に乗っていて家にいることが少なく、演習や航海から帰ってくると、あたしは父に甘えほうだい甘えた。家へは、部下の若い士官だの兵曹だのが出入りし、からかってあたしを、お嫁さんに貰うなどという。あたしは、

「いやよ。お父さまみたいなひとのところでない」と、お嫁さんに行つてあげないわ」といって、まだ生きていた母を笑わせたことがある。そうしてその母が病死してからは、父とあたしとふたりだけの生活が、三年間ほどつづいたから、この間に、父とあたしとの愛情は、ますます深まされた、といつてもよいのであろう。

父の、がっしりした肩、左の耳のわきのほくろ、うしろ向きだと、お尻が大きく脚が短く、大地へ根が生えたように見えた姿など、すべてはつきり目の底に残っている。

——強盗に殺された、あの恐ろしい夜のこと

は別にしておいて、その父への思い出の数々は、甘く悲しく、またおかしかったりするのがある。

家は雑司ヶ谷の墓地近く、ともいえるが、有名な鬼子母神さまからも遠くないところにあった。平家建ての、玄関の三畳まで加えて、五部屋しかない、小ぢんまりした家だったが、庭は広くて、百坪近くはあったのだろう。庭には、カヤの巨木があり、ざくろがあり、また八ツ手の株が、よく茂っていた。

思えば、この庭がひろく、樹木が繁茂していたということも、必然的に、父が殺された夜の忌まわしい記憶とつながりがあるものだけだ。いまはその話をよしておこう。この庭では、父があたしを相手に、お正月の追羽根をついてくれたことがあるし、あんたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ、熊本どこさ、せんばさ、せんば山には狸がおつてさ……といつしよに、まりをついてくれたこともある。父は、

「せんば山じゃない。せんば川っていわなくちやいかん」といった。

「だって、みんな、せんば山よ。山でなけりや、狸はいないんでしょ」

と、あたしも負けずに抗議した。

同じ庭で父は、小学校へはいつの間もなくのあたしに、自転車を買わせたものだった。父は、自転車のサドルのところをおさえて、あた

しがドッコイシヨ、とまたがると、いきなりグイとうしろからつきはなす。運動神経が鈍いのだろう、あたしはなかなかおぼえられなくて、立木へ自転車をぶつけたり、おちてころんで、膝っこぞうをすりむいたりしたが、そのころは母がまだ生きていて、赤チンを持ってきて、あたしの傷口へ塗りながら、

「よして下さいよ、あなた、千春ちゃんに女の子ですもの。自転車なんか乗れなくてもよござんす。顔でも怪我させたら、親でも子供に、申訳が立たないですよ」

と苦情を申し立てた。すると父は、

「ばかいえ。女でも自転車ぐらい乗れないと、あとで困ることになるぞ。アメリカとの戦争はな、どっちみち、日本が敗けるのだ。悪くすると、この東京のどまん中へ、艦砲射撃のたまが、ヒュルヒュル、ドンととびこんでくるし、アメ公の兵隊が、チュウインガムかみながら、機関銃かついで上陸してくる。その時にゃ、私はもう戦死しちゃまっているだろうな。お母さんと千春とが、歩いて逃げるなんてたいへんだらう。自家用車持っている都合がいいが、とてもそうはいかない。いいか。千春はその時、荷物台へお母さんに乗つけて、自転車で逃げるんだ。行く先きは、信州の軽井沢か鎌倉がいい。昔から外人が多くいたところへ行く。そうすりゃ、きつと助かるよ」

冗談のようにしていつて、軽く母の苦情を一蹴してしまっし、そのすぐあとでも、自転車

へようやくあたしが乗れるようになると、さて自転車は、輪が廻っているとなぜ倒れないか、ということの説明してくれたが、なんでもそれは、コマが倒れずに廻ると同じ理窟だそうで、ジャイロスコープの理論だという。あたしには、むずかしくてチンプンカンプン。また母が口を出して、

「あなた、むりですよ、そんなお話は。千春ちゃんには、まだお伽話のほうがいいんですよ。今夜はあたくしが、ハムレットのお話をし、てあげる約束になってますし……」

といったが、これに對し父は、

「うん、お伽話はけっこう。ハムレットも悪くないな。しかし、おれの話だって、千春の頭を、ジャイロスコープと同じことで、常に一定の方向へ回転させ、わき道へそれさせないという効目があるのだ。話がわかってもらわなくともかまわない。千春の頭へ、一つの印象を与えておく、というだけで、後にきつと役に立つことがあるのだ」

そういつてあたしの頭を、その大きな手のひらで、ゆっくり撫でてくれるのであった。

母は、父がいいだしたら、きかないことを知っている。それは、長いうちそうだった。

母もそれ以上には何もいわなかったが、とにかく、母に劣らず父もあたしを深く愛し、あたしというものについては、遠い将来までを見通して、常に心を配っていてくれたことは確かなのである。

やさしい母は、あたしが小学校五年の春、病没した。

美しくて、匂いを含む白い玉のようだった母――。

そうして、ある意味では、暴君と同じだった父に仕えて、その生涯を閉じた気の毒な――母。母のことは、あとでどうせ書かねばならないのだろう。母の死を、父はマニラにいて知ったということだった。死後二ヵ月ほどしてひどく痩せ、目が鋭く光るようになって帰ってきた父は、位牌に変わった母の前へ、軍服のまま、膝をキチンと折ってすわった。

ばあやのお霜さんというのがいた。

「旦那さま！ 奥さまは、旦那さまがお帰りになった時のお召しかえのシャツが、簞笥の三番目にはいつているということまで、わたしにおっしゃってから、お亡くなりになりました。それから、お嬢さまのことを……」

敷居のところへきて、ゲクゲク泣きながらうと、

「わかった。あとで聞く。向うへ行け！」

叱るようにつたが、それっきり、首を垂れ、両のこぶしを両膝の上で結んだまま、身動きもしない。あたしは、父の涙が、ポト……ポト……ポト……と、音を立てて畳におちるのを眺めた。父が泣くのは見たのは、その時がはじめてである。そうしてその時から、父の性質は、少しずつ変わってきたようであった。

それは、母と父とのあいだに、あたしの知ら

ない何かがあったということを、十分に推察させるようなものでもあった。

父は、かどが取れてきた。

世間では相変わらず父を土佐犬だと思っていたのかも知れない。けれどもほんとうはもう、そうではなかったのである。母が丹精していた万年青の鉢を、生前は見向きもしなかったのに、庭先でしゃがんで、母がしたのと同じに筆で洗ってやっている。そのうしろ姿を見ているだけで、父が変わったのだということ、あたしは鋭く感じたくらいであった。それ以来は父の任務が、海上でもなく外地でもなく、自宅から毎日海軍省へ通うことになったが、おそらく終戦を迎えるまでのあいだ、父が誰かと議論したり、押しが強くて人に迷惑をかけたあたりなどということは、いっぺんもなかったのではないだろうか。

戦局は、次第に悪化していた。

ずっと前の自転車の時の父の予言が、どうやらそのままになってきた。

母の死を、悲しんでいるだけの、心のゆとりもないほどだった。

父は、軍人にだけ配給されたいらしい、銀紙に包んだ羊かんなどを、お菓子に餓えているあたしのため、そっと軍服のポケットに入れて、持ってきてくれたりなどしたが、やがて東京には空襲があるようになった。

夜空のB29を、サーチライトがとらえた時、あたしは宝石のように美しいと思い、そんなに

空襲を怖がらなかったが、父は、防空壕を改築するのだといいた。

「庭へとびだして、それから防空壕へはいるのじゃ、めんどうだからね。家の中から、すぐ防空壕へ行けるように、茶の間から横穴をほるのさ」

と説明したが、それは本来は、父のたったひとりきりの親友、橋本泰治がいたからのことであるらしい。この人物のことを、実はあたしは、名前を呼び捨てにしたのでは、相済まない、ということになるのだろう。小父さま、あたしは呼んでいた。小父さまは、以前から、しょっちゅう家へきていた。のちに、あたしを引取って、あたしの養父がわりになった人物である。

防空壕の改築は、その小父さまが、父にすめてそうさせたのであった。ああ、またしても、そのことが、父が殺された夜のことに密接な関係をもっていたのである。

昭和二十年の一月末、まっ白に霜の降った朝、その改築工事は、はじまった。

その前兆

1

数年のうちに、あたしはあの時の防空壕工事のことを、できるだけこまかく思いうかべる必要を生じた。だから、それをいま、大体は間違

いなく書き述べることができる。

父は、休日で家にいた。

雪になりそうだった空が、頼んでおいた鳶のかしらが出てきたところには美しく晴れ、それから一時間ばかりたった時に、庭のほうへ誰かきたような気がしたから、少し風邪気味で家の中にひっこんでいたあたしが出てみると、それは橋本の小父さまと、ほかに三人の学生だった。

小父さまは、そのころM大学の教授だったが、三人の学生を、それぞれ、山岸節夫、田代守、今村元一、と父に紹介した。彼らはみんな汚れた角帽をかぶり制服を着て、脚には、ゲートルを巻いていた。小父さまの家へ来合わせていたのを、工事の手伝いにつれてきた、というのであった。

父は、穴から出てきたところで、シャベルの土を、お茶碗のかけたのでこそげおとしながら、「やア、それはどうも。学生諸君の救援隊とはありがたいね。なに、町内のかしらにきてもらってね、いま、穴を横へ半分ほど掘ってしまったところだよ」

といい、橋本の小父さまは、「海軍中佐がもぐらもちの真似しなくともいいだろう。遠慮なく、手伝わせろさ。いや、実はね、この諸君は、わたしのところへ相談にきた。陸軍へ行こうか、海軍へいこうか、どっちがいいかと迷っている。君の判断を聞かせてもらおうと思ってきたわけだよ」

と答えた。

一億一心、屍しかばねを越えて進め、といわれた時である。学生たちは特攻隊にはいろいろとしていたわけだった。父はシャベルを片手について顔を仰向け、青い空を深々と眺めた。

しばらく黙って考えていて、それから縁側へ行って腰をかけた。

「君たちは、軍人になり、国家に一身を捧げようというわけだね」

「は、そうです」

と、中でもいちばん痩せっぽちの、青い顔をした山岸という学生が、まるで軍人になったように、直立不動の姿勢で答えた。

「ふん。それでその決心は、誰かにそうしろとすすめられてつけたのかい。それとも、自分だけの気持で、そうなったのかね」

「大体は、自分だけです。まだこのことは、両親にも話してありません」

「なるほどね。それで、あとのふたりの諸君も同じかね」

顔を見られると、田代という学生も、今村という学生も、やはり直立不動の姿勢をとったが、子供心にもあたしは、その田代という学生の、切れ長に澄んだ瞳ときりっと結んだ唇のあたりを、美しいと思った。

「わたしたちも自発的にです。べつに、誰にも、すすめられたものではありません」

「そうかい」

父は、うなずいたが、顔に微笑がうかんで

た。

「とすると、自分でそう考えたのだったら、自分で、そんなこと、よそうと考えることだって、できるわけだね」

「はア……」

「わからないかい？　つまり、もういっぺん考えろということさ。わたしは、優秀な若いもんが、少しぐらい、次の時代の日本に、生き残らなくちゃ困る、と思っているんだよ。だから、海軍にしろ陸軍にしろ、そうむやみにわたしはすすめたくないな。第一、せっかく軍人になったものに、竹槍持たせるわけにゃ、いらないよ。アハハハ……竹槍の話は、ますます、わからんだろう。まアいい。もぐらもちは一休みだ。みんなでお茶を飲もう」

あたしにも、竹槍の話は、なんのことかわからなかった。

しかし父はそのあとで、橋本の小父さまを加えての四人に、戦争の現段階を、かなり詳しく話して聞かせたようである。普通には、誰もそれを話せない時期だった。そしてそれは、軍艦マーチづくりの報道とは、まるっきり違った話だった。その話のために、三人の学生が、戦争に行く決心を捨てたことは確かである。ずっとその終戦後、この三人は父のところへきた。その時に父の話がなかったら特攻隊へはいっていったかも知れない。父のおかげでそれを避けえた。命拾いしたというので父に感謝したわけである。

かしらが、穴から出てきた。

「いけませんや。土台石のところが、あぶねんです。もういっぺん、左へ穴を曲げたほうがいいと思うんですが」

「そうか。よし、わたしが見る」

父が答えた時、あのいやなサイレンが鳴りだした。

警戒警報だった。

「千春は、防空頭巾、かぶっていろよ」

と父はいっておいて、かしらといっしょに穴へはいり、それから学生たちも、工事のお手伝いをしはじめた。

警報は、思ったより早くとけたし、それからあとは、あたしの気持が、なんとなくはしゃいだようにおぼえている。

掘り出された赤土を、庭のほうの口へ盛りあげて、今村という学生が、

「そら、できたぞ。ライオンが入口で頑張ってるんだ」

というと、山岸が、

「なんだ、ライオンじゃねえな。こいつは河馬だよ」

と笑った。田代が、口笛を吹いて、裏へ廻って行ったと思ったら、それっきりなかなか戻ってこない。今村が、あとから行って、田代を引っばってきた。

「ずるいぜ、こいつ。炭俵出して日なたぼっこして小説読んでいやがる」

「違わい。小説じゃねえや」

「ふん。じゃ、なんだい、あの小さな本は」
「詩だよ。お前らにはわからん。——それよりも、少し腹が減ったな」

あたしは、お霜さんが、台所でさつま芋をふかしているのを知っていた。

詩を読んでいた田代さんに、そのお芋を、すぐ持ってきてあげたいと思った。

工事は、かしらが、玄関のとなりの茶の間へ、家の中からの入口を作るところまで進んだ。かしらは、畳をあげ、床板をはずし、そこから中へもぐりこんだ。

橋本の小父さまがいった。

「家ではね、お勝手からはいるようにしたんだ。そこを少し広くとって、漬物なんか置けるようにしたよ」

「簡易地下室だね。ぼくとも、そうするか」

「できりや、そうしたほうがいいぜ。——ただし、この式の防空壕は、泥棒には不用心だ。庭のほうの入口からだ、どうさなく、家の中まではいってこられる」

「かまわん。泥的がきても、盗まれるものなんか、ありゃしない」

父は、笑い顔でいったが、のちに、ほんとうにその地下道から賊は侵入した。しかも、その賊が父を殺したのである。

午後の陽が薄れたころ、また警報が発令されたが、もう壕の工事は終わっていたか、それとも、あとはかしらひとりですむようになってい

たか、そのどちらかだったろう。

「やれやれ、これでいいや。おれは、どっちでもいいんだが、千春というものがいるのだから」

と父が、手足を洗い、座敷へ上がってからいったのを、おぼえている。

学生と橋本の小父さまとが帰ろうとしていたのを、

「まア待てよ。とっときものがあるぞ。ゆっくりして行け」

引きとめて父が持ちだしたのは、押入れにしまっていたウイスキーの角びんだった。そうしてそのあとはあたしの大きなお酒の席になった。酒を飲むと、父はじきに歌いだす。その歌が、ツンツンレロレロ、ツンレロという文句ではじまる、とても下品な歌だった。海軍で歌いはじめたものらしい。ラバウルでも、フィリッピンでも、硫黄島でも、それを歌ったのちがいない。果たして、その時も父は肩を横にふり、手を打って、ツンツンレロレロをはじめた。学生にもおぼえろといって歌わせた。ひとり、田代だけが、知らぬ顔して障子のところへよりかかっている。あたしは、いくども、田代のポーッと桜色に染まってきた横顔を、ぬすみ見していた。

「おい、橋本。きさま、この家へきて、どんなことをいつも考えるのか、おれにはわかってい

るつもりだぞ。今夜は、うんと飲めよ」

ウイスキーをつぎながらいったが、小父さまは、睨むようにして父を見て、

「ばかなことをいうもんじゃないよ。昔より君は愚劣になったな。さア、よし、ぼくも飲む。君は、やけになっちゃいかん。軍人も人間だつてこと、忘れないほうが賢明だな」

とやりかえしたただけだった。

山岸がいちばん酔い、ツンツンレロレロ、お前とおれとは——といっしょけんめい、くりかえしていた。

2

誰も知るように、空襲はますますはげしくなり、東京の全域がほとんど焦土と化した。

ところが、あたしの家の近くだけは、奇蹟的にも戦災をうけず、だからその意味ではあの防空壕が、まったく役に立たなかったのだから、まことに皮肉だといってもいいだろう。

やがて昭和二十年の八月十五日……。

終戦になるとその年の暮れまで、父は少しも家におちつかず、あの当時の地獄列車に乗って旅行ばかりしていた。そうしてその旅行もひどく長く、時には二週間あまりもかかって、あげくにげっそりと痩せて帰ってくるものがあつたから、

「お父さま。もうよそへ行かず、家にいてちょうだい。千春、淋しいのよ。それに心配ですもの」

といってみたが、それだけは父も昔のように

頑固で、あたしの言葉など、耳に入れてはくれなかった。父は、部下のうちの戦死者遺族を、北海道から九州まで訪ね歩いて、お詫びを述べてきたのである。肥っていた父は、見るかげもなく痩せた。そうしてその遺族訪問の仕事が一段落つくと、ぐったり疲れて、虚脱の状態におちいつてしまった。

あたしは、まだ子供だったから、そんなに深く考えることはなかったけれど、それはひどい昏迷と動揺との時期だった。父は、現役の軍人だっただけに、木から落ちた猿みたいなもので、前途に対する目論見も立たず、ただ茫然として、世の中の移り変わりをしているよりほかなかったのだろう。それでも、元氣を出そうとして、あせっていたのにはちがいない。ある日あたしが学校から帰ると、父は淋しそうにしていた。

「どうだ千春。お前は東京と田舎と、どっちがいいと思うね」

「さア、どっちでしょうか。東京も、楽しいところ、なくなっちゃったのね。だけど田舎だって、同じじゃないのかしら」

「実はね、橋本の小父さんが来たよ。そしてね、大学の先生をやめて、本屋さんをはじめのだって、話して行った……」

「あら、あら、どうしてですの。本屋さんなんかより、大学の先生のほうがりっぱだわ」

「うん、お前には、よくわからないことさ。アメリカの役人と喧嘩をしたのだそうだ。あの男

は、気が弱くてね、それでいて喧嘩したっていうのだから、よっぽどのがあったのだろう。そのあと、学校がいやになったというわけだ。古本屋だろうと思うが」

「古本屋は、儲かるのですか」

「それはわからない。歴史の先生が急に商人になったって、そううまくは行かないだろう。しかし、お父さんも考えた。いつまでもぼんやりしてはいられない。だから、田舎へ帰って、お百姓にでもなったら、と思ってみたのだ。千春は、お百姓嫌いかい」

「ええ、それは好きじゃありませんわ。学校の菜園作ると、指の爪へ、泥がまっ黒にはいってしまうんですもの」

「そうか、そうか。千春がいやだというなら、お百姓よそうね。田の草とりなんかやらなきゃならない。田んぼには、大きな蛭ひるがいてね」

「怖いわ。血を吸うんでしょう」

「そうだよ。アハハハ……蛭は、お父さんも大きらいさ」

あたしの気を引いてみただけで終わったけれど、父としては、さしずめ暮らしのことでも、頭を悩ましていたわけだろう。父は、田舎の程度富裕な農家のひとり息子だった。農業を嫌って軍人になったものである。その田舎に、少しばかりの山林があり、戦後の木材の値上がりで、それが一時のうち、父とあたしの生活をささえた。でも、山林はじきに売りつくしたらしい。次第に暮らしは苦しくなってきた。

ついでにいうと、そのころに、ばあやのお霜さんが暇をとっている。お霜さんの息子は名前を山崎哲男やまざきてつおといつて、これはもと町の与太もんみたいな男だったそうだが、どうかした拍子で堅気になり、母親を引取ることになったわけである。父は、お霜さんがいなくなっても、かわりの女中など雇わなかった。家計のことを考えたのだろう。家の中は、完全に父と子とのふたりだけになった。炊事やお掃除を、父もしてくれた。父の炊く御飯は、いつも焦げたり、しんがあたりした。冬のうちのお洗濯で、あたしの手には、しもやけができてしまった。

——終戦翌年の春、あたしは中学へはいっている。

この中学で、いちばんはじめに述べたキャムベルさんのことがあったのだけれど、それ以前に、父とあたしとについて、もっともっと大きな事件が起こったことを、ここではくわしく書いておかねばなるまい。

六月の入梅になってから間もなくだった。

父が、だしぬけに、いい出した。

「ねえ千春。お父さんも、やっと決心がついたよ。事業をはじめ。金融会社だ」

「金融会社って？」

「早くいえば金貸しさ。実はね、去年のお正月だった。わたしとこへ二三度きたことがあるから、千春だって知ってるだろう。川口さんというひと」

「ええ、知ってるわ。頭の禿げた、目の大きな

ひとね。カッパみたいな顔してるから、おかしかったわ」

「あれはね、海軍報道部へ出入りしていた男だ。まじめなやつだが子供が多くて貧乏している。私に金を貸してくれといってきたのでね、ちようど、お父さんもまだ余裕があったから、二万円だけ貸してやったわけだ。ところが、こないだやってきて、今度いい新聞社へ勤めることになったし、生活も楽になったのだといつて、貸した二万円を返してくれたし、そのほかに利子だといって、五千円もおいて行ったのさ。期間は一年をちょっと越しているけれど、二割以上の利子なんだ。銀行だと、とてもそんな利子につけてくれない。ところが、聞いてみると今はそういう金の利子はとても高い。トイチってのもあるそうだよ」

父が、そんなにたくさんさんの利子は受取れないという、川口さんは、トイチの利子の話をしたのだそう。それに比べると、一年で五千円ぐらい、ただみたいなのだといい、それを押しつけるようにして帰って行った。しかし父は、そのことから、高利貸しをしようと思ひ立ったわけである。トイチというのは、十日に一割の利子がつくということで、それだと、元金いくらでいくら儲かる、ということ、父はちゃんと計算してみたというのであった。

「どうだ、いい商売じゃないか」

「そうね。お金儲けはなすったほうがいいと思う。だけど、お父さまに、そんなことおでき

になる？」

「できるさ。問題は資本金を作ることだ。見ていろ、今年の暮れまでに、百万円も一千万円も儲けてみせるぞ」

「わア、すごい！ それだったら、とてもいいわ。千春に新しい自転車を買ってね。いまの、じきにもうだめになるわ」

「よしきた。そんなもの、わけない」

合法的にはなく、もぐりでやるつもりだったのだろう。海軍の忠誠なる軍人だったものが、そんなことをやるについては、父も良心的にはやましいものがあつたにちがいない。しかしあたしの前では、わざと元氣な顔をしていた。あたしのほうは、べつに悪いことだと思わない。世の中のすべてが、裏街道ばかりだった。父に仕事ができ、しかもお金儲けだから、とても結構だと思つた。

父は、金策にかかった。

家と土地がある。

それで五十万円もできることになった。

次に、友人知己、親戚をかけ廻つた。

新聞記者の川口貞雄さんが、一万五千円、出資した。

父の従弟で、下谷の食料品店をやっていた友野乙也という男が、たいそう乗氣になつて二十万円出した。

橋本の小父さまが、これは本屋の商売があまりうまく行かず、また、

「ばかだな。高利貸しなんて、みっともない

よ。そんなこと、よせよ」

といつて父に反対したが、昔から父は、この小父さまに対しては、とかく押しが強かつたのだつたという。強引に小父さまを説き伏せた。そうして小父さまは、工面したお金を三万円出資した。

合計で、七十四万五千円だった。

父は、資金が百万円欲しかったのだそう、しかし、それだけをこしらえるのがせいっぱいだった。六月からかかつて、七月の終わりに、それもやっと、まとまったのであつた。

八月一日、月曜日のことである。

あたしは、暑中休暇になって家にいたが、この日の屋少しすぎ、アロハを着た、いやな目つきの方が、やってきた。

玄関で、

「ちわア。こんにちはア……」

と、御用聞きのようないかたで、案内を乞う声が出たから、はじめにあたしが出てみると、いきなりその男は、

「だしぬけにあがつて、失礼さんですが、お宅に、うちのおふくろがきていますでしょう。おふくろに、会わせておくんなさい」

扇子で顔をあおぎながらいった。

唇のはしに、傷のあとがあり、それでいて日焼けした顔に、青いサングラスの眼鏡をかけている。

「あの、どなたのことでしょう。おふくろさんて……」

「私は、お宅で御厄介になっていたお霜の件です。山崎哲男っていうんですが」

と、その男は、家の中をのぞきこむようにしていった。

鏡の中の賊

1

「ああ、ばあさんなら、ずっと前に、もう暇をとったんですよ」

「それは知ってますがね、おとついから、わたしとここにいなかったんですよ」

「でも、家へはきたことありませんわ。ばあさん、たっしやだったんですよ」

「たっしやか、たっしやでねえか、顔見たら、わかってるはずだと思うね。出して下さいよ。俵が、おふくろに、詫びをいいにきたんだとい

てくださりやい」

あたしと押問答の末に、山崎哲男は、

「ちょッ！ おふくろをかばい立てするならし

てもいい。しかし、ぼかにするな！」

凄んでいって、上がり口へ腰をかけてしまっ

た。

このお霜さんの息子が、堅気になったというのは嘘だったらしい。お霜さんは、息子のところを飛び出した。うちでかくまっていると、見込みをつけて、山崎は押しかけてきたのである。

あたしが腹を立てながらも、ばあさんがきていないことを話していると、父が玄関へ出てきた。

父は、悠然として、男の前であぐらをかいた。黙って、じっと顔を見ているだけで、口をきかない。

喧嘩になるのではないかと心配したが、そこは海軍中佐だっただけの貫祿だろう。男のほう

が、だんだん困ったような目つきになり、改めて、ペコリと頭を下げ、それからお霜さんのことをいい出した。ずいぶん、長くしゃべった。親子でしょっちゅう口争いをしたのだという。自分が酒を飲むから悪い。今後は禁酒して親孝行になる。だから、母親をつれて帰らせてくれ、というのであった。さんざんにしゃべらせてから、父は、

「さア、もうわかったよ。君のお母さんは、きていないのだ。疑うのだったら、家へあがって見てもいいさ。帰ってもらおう」

にべもなくいったが、それには男も、ムツとした顔つきになり、そのくせ、しかたなしに立ち上った。それから、

「お邪魔さんでした。凶星と思ってきたんですが、きていねえってんじや、諦めますよ。——もし、あとでできたら、わたしが詫びをいいにきたってことを、おふくろに話しておくんさいよ」

疑っている口調でいってから、いったん、そとへ出ておいて、また玄関まで引返すと、

「おふくろが、話していました。庭に防空壕があるんだそうですね。大きい防空壕だっていうことだが、中を見せてもらってもいいでしょうか」

といったのは、そこにお霜さんがかくれているとも思っただろう。よくよく、執念深く、また疑い深い男だった。まだ当時のままにしてあった防空壕へ、庭の入口からはいり、しばらくごそごそしていたようだが、出てから彼は、あの河馬に似たライオンの盛土のところ

で、ノソリとつつ立ち、何か考えるようにしてこちを眺めてから、さも未練そうに帰って行ったのであった。

「ばあやも、とんだ息子を持ったものだ。ばあやはお給金をためていたんだよ。息子に、せびりとられるのだろう。たまらなくなつて飛び出したというわけだ。間違いをしでかしてくれなけりやい」

あとで父はいつたが、それだけでそのことは

すんだ形になったから、あたしも深くはさきのことを考えなかった。そうしてその日の夜になつてから、父はあたしに、たくさん紙幣の束を出して見せた。

「どうだ。これで七十四万五千円だよ」

と、父は、茶の間のちゃぶ台へ、自慢そうにして、その紙幣の束をつみあげたが、そのころは千円札もまだ出ていず、全部が百円札だったから、ある程度それはかさ高なものだった。

「わア、すごいな。このお金……」